

2023 年のアユ資源調査結果概要

佐々木 賀治・尾崎 友輔・太田 滋規・臼杵 崇広・大前 信輔

1. 目 的

アユの資源水準や成育状況を評価するため、魚群調査、成育状況調査、産卵状況調査およびヒウオ生息状況調査を実施した。

2. 方 法

魚群調査では、1 月から 8 月まで各月 1 回、北湖の水深 30m 等深線付近の定線調査コース上に出現する魚群数を観測した。

成育状況調査では、エリとヤナの漁獲標本を収集し、体長等を測定した。

産卵状況調査では、8 月から 10 月にかけて 5 回、北湖に流入する 11 河川の産卵場においてアユの産卵量を調査した。

ヒウオ生息状況調査では、10 月から 12 月まで各月 1 回、北湖の 18 水域で網口 1m×2m

の角形幼生網による 1,000m の水平曳きを各 1 回、計 18 回行い 1 曳網あたりのヒウオ採捕尾数を求めた。

3. 結 果

魚群数は平年の 3～79% で推移した(図 1)。エリ漁獲アユの平均体長は 3 月までは平年並であったが、4 月以降は平年を上回った。ヤナ漁獲アユの平均体長は 3 月を除き平年を上回った(図 2)。産卵量は産卵期の河川水温が下がり、15.2 億粒で平年の約 20% であった(図 3)。ヒウオ生息密度は平年の 11～19% で推移した(図 4)。

これらの調査結果は水産試験場ホームページに掲載し、漁業関係者等へ情報提供した。

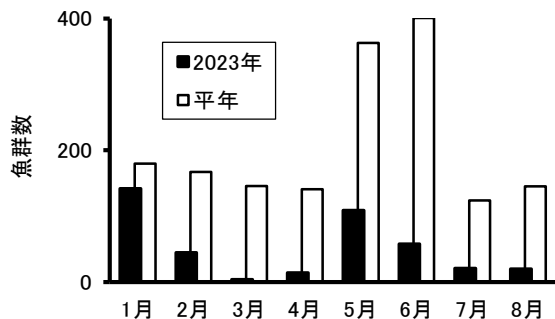


図 1 魚群数の推移

※平年は過去 10 年から最大最小の年を除く平均

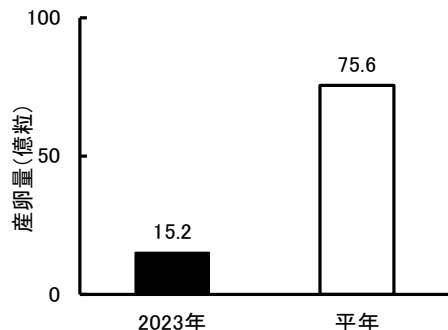


図 3 天然河川における産卵量

※平年は過去 10 年から調査が不十分であった 2018 年、最大、最小の年を除く平均値

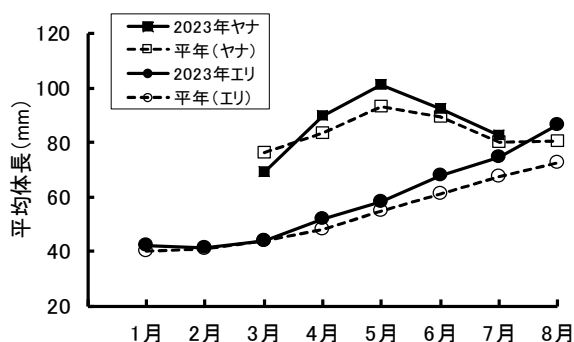


図 2 エリおよびヤナ漁獲魚の平均体長

※平年は過去 10 年の平均値

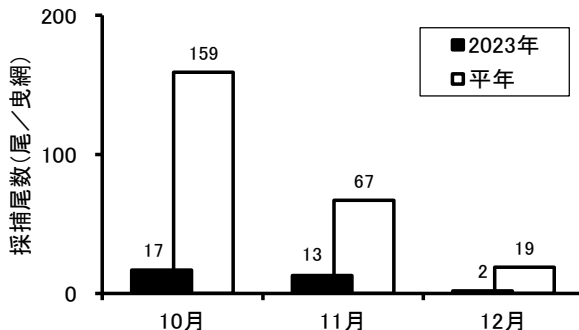


図 4 ヒウオ生息密度

※平年は過去 10 年から最大最小の年を除く平均